絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践
～絵本『100かいだてのいえ』の世界を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
前田 梨湖・宮原 穂乃果・吉田 光里
馬場心愛・案納風香・馬場七海
森田 琴海・吉武 未来・緒方 遼
中島 希・三浦 ななみ・大西 美咲・中村愛

題材とした絵本：『100かいだてのいえ』
文：岩井俊雄　出版：偕成社　発売年月：2008年5月

タイトル：「お仕事冒険ツアー」

実践準備の担当：プロデューサー 前田 梨湖、音楽 宮原 穂乃果、記録・報告書 三浦 ななみ.大西美咲.中村愛

実践時の担当：音・演奏 宮原 穂乃果、
カメラ・音響 :大西 美咲.三浦ななみ
カンペ:前田梨湖
冒険家:森田琴海･吉田光里
美容師:緒方遼
警察官:吉武未来
ケーキ屋さん:案納風香･馬場心愛
お花屋さん:中島希
医者:馬場七海

1. 題材『１００かいだてのいえ』選定の理由

この『100かいだてのいえ』の絵本を選んだ理由は、劇として子どもたちと楽しむ時にいろんな部屋があり、またそれを職業の部屋にすることで子どもたちの夢を広げることができるのではないかと考えたからである。探検に子どもたちと一緒に行くようにしてみんなで楽しめると思い選定した。子どもたちみんなが知っているシリーズということもあり子どもたちの興味をひくことになった。

（執筆者：大西美咲、三浦ななみ）

2.絵本の世界から遊びへの展開

絵本の階をお仕事にし、探検家と一緒にお仕事の階を探検するという設定にした。最初にカメラで絵本の1部を見せ、『100かいだてのいえ』とはどのような絵本なのか分かるようにし、そのまま私たちの考えた、「お仕事のいえ」に子どもたちが入り込むことが出来るよ

うに場面展開を行った。階が上がっていく際に、冒険家が階段を上るイラストとペープサートを利用し、子どもたちも階段を上っているような気持ちになるような動きをカメラで写した。一緒に楽しめるような声かけをした。子ども達に自分のなりたい職業への興味を引き出す。　それぞれこのお仕事はどういうことをするかなど、使うものをシルエットクイズにし、答えてもらう。(下記の写真)そこからこのお仕事はどういうことをするかを伝える。

（執筆者:案納風香・ 馬場七海）

各職業のシルエットクイズで使用したもの

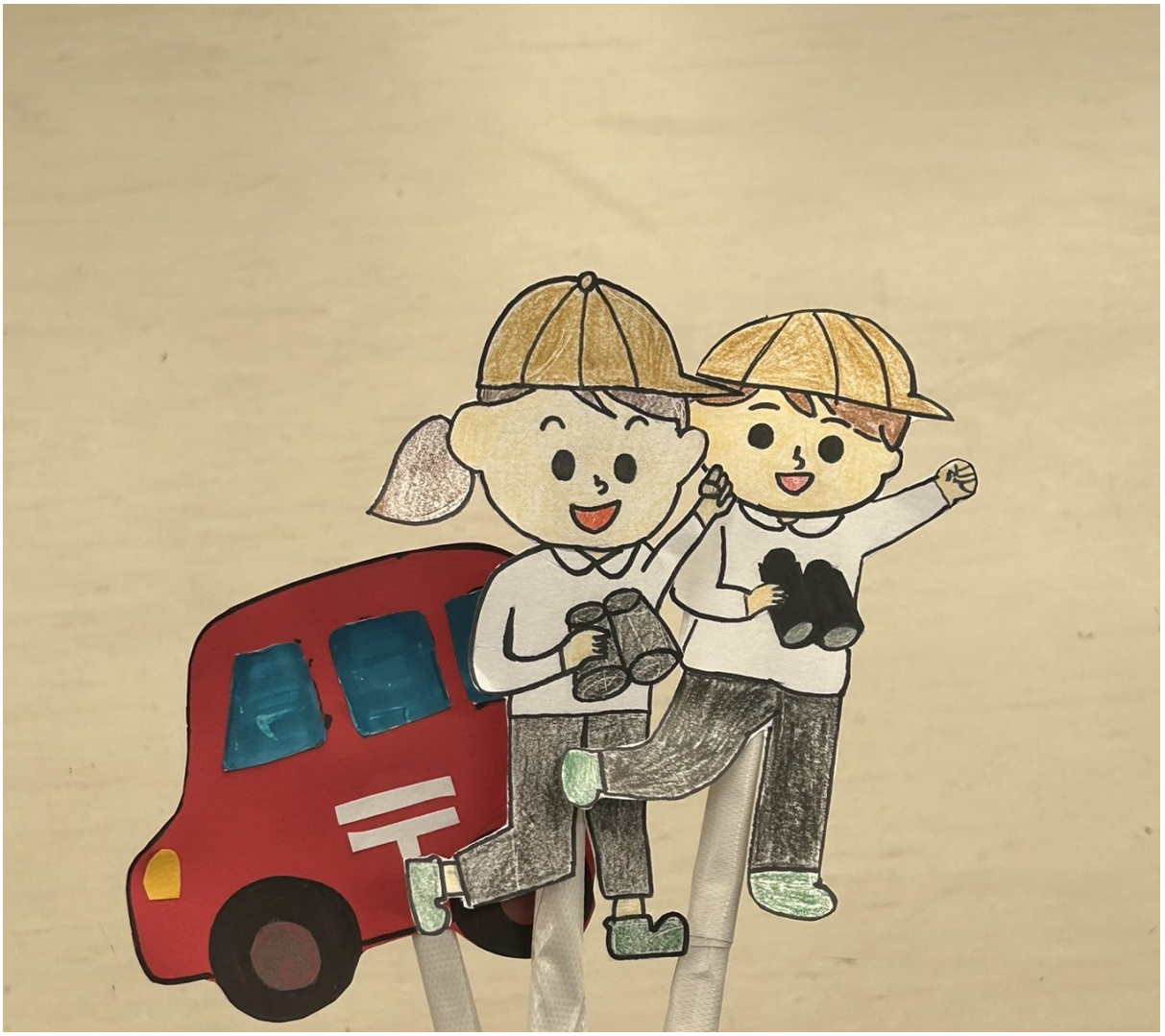
3.実践に際して大切にしたこと

　世界の様々なものに興味を示し、なりたい職業や憧れを持ち始めるこの時期に、色んな職業がある事や、職業について少しでも考えるきっかけになり、成長することへの期待が高まればいいなと思い、様々な仕事の部屋を作った。学生が職業の人になりきり、ひと目で見てもどんな職業かを思いつけるように衣装にもこだわる事で子どもがリアルに想像しやすく、楽しめるのではないかと考えた。

　また、画面越しであっても学生と子どもたちとが繋がるためにはどのような工夫が必要かを試行錯誤しながら話の展開を考えた。シルエットクイズに答えながら話の展開を進めることで、最後まで楽しみながら参加出来るのではないかと思った。さらに、冒険家や郵便車のペープサートを活用することで、こども劇場の世界と絵本の中の世界を繋げる役割を果たしたのだと考える。その他にも、現場にいる先生方と連携できるという点を活用し、小道具やプレゼントを作成し、ケーキの飾り付けを子どもたちへお願いしたり、一緒に歌を歌ったり、最後にプレゼントを渡したりすることで、ただ鑑賞するだけではなく参加しながら楽しめるようにと考えた。

その時の子どもの反応を見たり聞いたりしながら流れを変えたり、言葉を拾ったりすることで、より一層一体感が生まれたように感じる。離れた場所であっても繋がっていること、一緒に活動できるということを体験して欲しかった為、その部分を大切にしながら実践を行った。

(執筆者:緒方遼)



大学から園へものを運ぶ時、各部屋の階段を登る際に使用した冒険家のペープサート

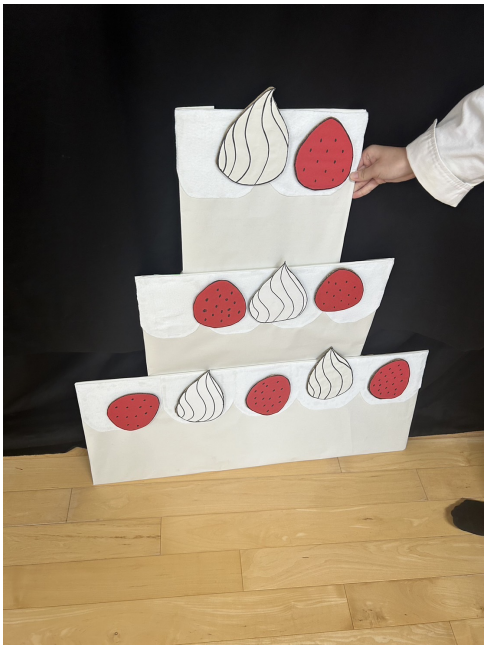
4.内容について

（1） 全体の構成

まず初めに「みんなに向けて手紙を書いたから今から届けに行くね」という導入から始めた。実際に届けられているという想像をしてもらうために、ピアノで音楽を付け、草を描いた画用紙の上に車のペープサートを走らせた。

その後、「届いたかな～？」と子どもたちに問いかけ、園を訪れている大谷の教員と一緒に手紙を読んでもらった。そして、冒険家が登場し「みんなでお仕事のおうちにいってみよう！」という声掛けをし、画面外に出る。画面には、草を描いた画用紙に冒険家2人のペープサートを歩かせ、家の中に入っていく想像ができるようにした。その後、警察官→美容師

→ケーキ屋さん→お花屋さん→お医者さんの順に1階ずつ登っていく。数種類の画用紙に描いた階段を変える。各職業ごとに、2.3問のその職業にまつわるシルエットクイズを行った。登り終わると、ダンボールで作った小さな部屋を映し、冒険家が「〇〇のお部屋だったね〇〇の人にお話聞いてみよう！」と言い、職業の人が登場する。最後、お医者さんが終わると、冒険家が「沢山お仕事があったね、みんなは何になりたい？」と問いかける。「もうすぐ最上階にたどり着きそう！」と冒険家が言う。最上階に着き、そこでは誕生日会が行われている。全ての職業の人と冒険家がいて、今は12月だけど今日はみんなのお誕生日をお祝いしたい！と伝える。ケーキ屋さんは12月生まれの子どもたちにケーキを作るのを手伝って欲しいとお願いする。子ども達がいいよ！と言ったら、「今からケーキを届けるね！」と伝え、先生にダンボールで作ったケーキと生クリームといちごを出してもらう。ケーキ屋さんは飾り付けをする子ども達に声掛けをしながら見守る。それ以外の職業の人は後ろの壁に飾り付けを行う。ケーキが完成したら、大谷の教員がじゃあ届けてくるね！と子どもたちに伝え外にケーキを持って部屋から出ていく。ケーキ屋さんはそれを受け取ったつもりで「届いたよー！」と伝える。そして、最後にみんなでハッピーバースデーの歌を歌う。最後に一緒におうちに来てくれたみんなにメダルのプレゼントをする。



(執筆者：前田梨湖)

子ども達に飾り付けしてもらったケーキの写真

（2） 子どもたちとの対話について

今年もコロナウイルス対策としてオンライン上での対話となり、顔がしっかり見られず、そして、子どもたちの反応もよく聞き取れないなどと意思疎通が出来なかった。子どもたちと一緒に冒険家になるという目的があり、冒険家と一緒に職業の部屋に「行ってみよう」という掛け声をするという形を取った。しかし、リモートなので時差で「行ってみよう」と言う声かけがずれていたのが気になったのと、「みんなで言ってくれるかな？」の後にすぐ「せーの」と声掛けたため子どもたちの「うん、いいよー！」という反応に私たちが応えることが出来ていなかった。冒険家の家のクイズをした時に、「これ何かわかる？」という質問に子どもたちがすごく答えてくれて一斉に答えて聞き取れないところもあったがその後「せーのって行ってみてー」という声掛けで子どもたちが声をそろえて元気よく答えてくれていた。ほとんどの子どもたちがクイズに正解して楽しそうに参加してくれていた。

また誕生日会を行い、全員でケーキを飾るとゴチャゴチャしてしまうため誕生月の子どもにケーキの飾り付けをお願いするという工夫をした。その間周りの子どもへの対応で、ケーキの様子を伺ったり、部屋の飾り付けの様子を伺うなど工夫した。子どもたちも楽しそうに参加していた姿があった。しかし、その中でもやはり、何人かケーキの飾り付けをしたかった子どもがいたため、なにかもっと工夫が必要だと感じた。そして、お誕生日の歌を歌う時、「お誕生日の歌知ってる？」の質問の後「知ってる」とは言ったものの違う歌を歌っている子どももいたがそのまま知ってる前提で歌を歌ったため、一つ一つに対する子どもたちへの反応が足りなかったと感じた。歌を歌っている時は、子どもたちも一緒に歌ってくれたり、私たちがプレゼントしたメダルも気に入ってくれていたため嬉しかった。

（執筆者:吉田 光里）

お花屋さんの花束

（3）表現の工夫

まず、子ども達も参加出来るように、シルエットクイズを出したり、ケーキ作りをしてもらったり、一緒に掛け声をしたり、最後にプレゼントを渡したりと、色々な場面で参加出来るよう工夫した。次に、部屋をどんどん上がっているというのが分かるよう、ペープサートを使ってそれを表現したり1番上の階に上がるまでに会話を入れたりなどの工夫した。道具の面では、子どもがパッと見ただけで職業を理解できるよう、職業に合わせて小道具や衣装を準備し、どんな仕事なのか理解できるような職業説明をした。リハーサルの時は職業役の人がはけていく際に子ども達の方を向いて手を振っていて、子どもにバイバイするみたいに見えたので本番では職業の人に手を振った。シルエットクイズでは画面にシルエットを近づけて見やすい工夫をしたり、話している人は1歩前に出て話したりなどパッと見てすぐ理解できるような見え方の表現を工夫した。誕生日会の準備の場面では子ども達がケーキを作りながら学生は飾り付けをし、一緒にしているかのように表現することも工夫した。

（執筆者：森田琴海）

誕生日会の飾り付け

（4）音と音楽

　音楽の使用に関しては大きく三つの場面に分けて演奏した。
一つ目の園に手紙を持っていく場面では「やぎさんゆうびん」をピアノで演奏した。ペープサートで郵便局の車がはしる場面だったため子どもたちも知っているであろう曲を弾くことによって待っている間も物語に引きつけることを目的とした。また、今園に手紙を届けているんだと子どもが思えるようにこの曲を選定した。
二つ目では、階段を上る場面やケーキをつくる場面で「元気に出発②」をピアノで演奏した。階段を上るペープサートは繰り返しある場面なので子どもが覚えやすいように、長くは弾かずワンフレーズで終わりにすることを意識した。また、ペープサートの画面を見ながらなるべく一緒に終われるようにした。
三つ目の、誕生日会の場面では「Goodmorning」をピアノで演奏した。誕生日会ということでこの曲を選んだ。また、1回目であまり歌えなくても大丈夫なように２回目もあったのだが子どもは知っていたようで1回目から歌うことができていたようだった。

使用曲「やぎさんゆうびん」「元気に出発②」
　　「Goodmorning」

（執筆者：宮原穂乃果）

（5）　プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

プレ幼教こども劇場を行った際の子どもの姿で気になった点として、メダルの色とケーキの飾り付けで揉めていたりしていた子どもがいた事だ。最初は色を沢山用意することで見た目や、好きな色の幅が広がるようにと思っていたのだが、その結果が良くない方向となり物語に集中出来ていない子どもが多々いたため、改善した。
また、ケーキの飾り付けでもプレでは挙手制にして、保育者に決めてもらうという方向だったのだが、当てられなかった子どもが泣いてしまい、物語に集中出来ないことがあった為、改善をし誕生月の子どもに飾り付けをしてもらうことに変更した。ケーキの飾り付けは子どもたちみんながやりたい事だと思った。しかしそれを誕生月の子どもに飾り付けをしてもらう事で、誕生日と言う大切なことに触れてもらう、嬉しさを知ってもらうということに繋がったのでは無いかと思った。その他にも、「行ってみよー！」の掛け声を事前に伝えていなくても子どもたちの声が段々と大きくなってきた事が物語の中に入っている様に感じられた。

（執筆者:馬場心愛）

（6）取り組む過程での改善と工夫

「お仕事冒険ツアー」の制作を進める過程で、一番大きく見直した部分は、それぞれの職業のお部屋に行ったあと最上階で行われるパーティーを、結婚式からお誕生日会へ変更した点である。当初の計画では、警察官とお医者さんが結婚し、子どもたちにはお祝いとして渡すウエディングケーキを作ってもらうという流れであった。しかし、それではなぜ結婚するのかがよく分からない、「お幸せに」という声掛けの意味が子どもに伝わりにくいなどの指摘が挙がり、結婚式ではなくお誕生日会という子どもに親しみのある会へと変更した。
そして、最後に全員で「HappyBirthday」の歌を歌うことでお誕生日をみんなでお祝いすることの楽しさや嬉しさを感じられるよう工夫した。さらに、最後に子どもたちにプレゼントとして渡したメダルも、当初は様々な色の折り紙で用意していた。しかしそれでは「○色がいい!!」と取り合いになってしまったり、欲しかった色のメダルが貰えずに泣いてしまう子どもがいるかもしれないと考え、メダルの色は全て黄色で揃えるという工夫も加えた。

(執筆者：中島希 吉武未来)

場面切り替えの時に使用したもの

（7）幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

まず、絵本のページを映した際、5階までの絵本の様子を見て、子どもたちが一緒に階数を数えたり、動物などの名前を声に出して喋っている子どもが見られた。今からどんなお話が始まるのか、世界観をあらすじのように読み取るにはとても良かったのではないかと、子どもたちの反応から読み取れた。私たちの声掛けにも、「お手伝い好き」と言って、積極的に参加しようとする姿が見られた。これらから、普段から保護者や保育者の手伝いをする事で喜んでもらえるという自己肯定感の形成や、思いやりの心が育っているのだと考察した。シルエットクイズの際は、ほとんど正確に答えられている様子を見て、想像力や連想力が備わっていると感じた。また、みんなの意見とは違う意見を声に出していた子もおり、自分の意見をしっかり確立しているのだと感じた。また、各仕事役の人が、「お仕事の人になりたい人居るかな？」と問いかけた時、積極的に手を挙げる子どもが多かった。なりたいものがある子もいるだろうが、流されて手を挙げた、或いはよく分かっておらずに手を挙げた子どもも居るだろう。しかし、少なからず、自分が今何を見ているか、劇を見て聞いて、少しでも仕事という物事に興味関心が向けられたのではないかと感じている。このような経験により、少しでも将来に関する意欲に繋がればいいと考えている。

（執筆者：中村愛）

それぞれの職場の様子を書いたもの

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【前田 梨湖】
　今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びは、子どもがどこでどう楽しめるかをグループ一人一人が考え、協力することの大切さである。準備の過程では、最初物語を考えるのも難しく、自分の意見に自信が持てなかった。みんなどうしていいか分からず、意見を出し合う場面でも話が進まないことが多々あったと思った。しかし、準備を進めていくうちに頭の中で物語の想像が広がり、ここをもっとこうしたらいいかも！とみんなの意見が出てきて、作っていてとても自信が持てるようになった。道具も自分が作っているものが終われば終わってない所に手伝いに行くなど、一人一人が協力し合い、作品創作への意欲を高めることが出来ていたと思う。でもプレに、本番とやるまで子ども達の反応は自分の想像でしかないため、不安と自信が入り交じっていた。しかし、プレも本番も子ども達は楽しそうに参加してくれて、すごく嬉しかった。自分たちが、ここはこうした方がいいかも！と考えたことで子ども達が沢山反応してくれたりして、子どもと関わる事の楽しさを改めて感じた。そして何より終わったあとグループのみんなで頑張ったね、お疲れ様と言い合えたことが私にとってすごく嬉しかった。

【馬場七海】
　幼教子ども劇場を通して、改めて感じたことは
子ども達に直接会って声をかけて表現をできる大切さを再確認すること。リモートならではの演出など子どもたちも私たちも楽しかったが、物語を進める上で難しいこともあったと思う。問いかけや、クイズなど、沢山聞こえたくるものしか拾えなかったりと、子ども達に、伝える聞こえる感じることを直接伝えることが出来ないので、リモートで伝えていくには難しく感じた。だが、リモートならではのことが出来て子どもたちも、私達も楽しく感じた。この劇を完成させるには1人ではできず、一人一人が行動して、アイディアを出したからこそ、達成感を感じるものが出来たのだと思う。練習など、全員揃うことがなかなかできない中、行けない人の分のことも考えてストーリーを考えてくれたので誰1人迷うことなくできたと思う。リモートで関わることは中々ないなと思ってるので、このような形で経験することが出来て良かったと思う。今回のもので学んだことをこれからも大切にしていきたいと思う。

【案納風香】
　今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びは、協調性を持って取り込むことの大切さである。協調性を全員が発揮することによって、「良いものを作っていこう」という気持ちがより高まり、実際に行動していくことがこのチームはできたのではないかと考える。準備の過程では、一人ひとりがこれまでの子どもとの関わりを活かして、どうしたら子どもたちはよりお仕事冒険ツアーの世界に入り込んでくれるのか考えて案を出し合うことができたと感じる。また、出し合った案を上手くまとめ、子どもたちが主体になって楽しむことの出来るこども劇場を作って行くことができたのではないかと考える。小物作りなどでは、全員で手分けして作業を進め、短い時間内でレベルの高いものを作ることができた。いざ実践となると、プレでは私たちの緊張や予想していなかった子どもの反応などがあり、なかなか上手くいかない場面もあった。しかし、プレでの反省を元に話を全員で行い、２回目の本番では課題を達成することができたと考える。zoomでの子どもとの関わりは思っていたよりも難しかったのだが、それぞれがアドリブなどを用いて発表を行ったことで、子どもたちがより物語の世界に入って行くことが出来、子どもたちの楽しそうな姿を見ることができたのではないかと考える。今回の発表で、臨機応変に関わることの重要性についても学ぶことができた。このチームで、やり遂げることの達成感を得ることが出来たと感じている。

【宮原穂乃果】
　今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、一人一人が自分に出来ることを考え協力しながら物事を進めていく大切さを学べたことである。劇を進めていく中で問題点を発見したり修正したりして行くなかで、1人で全て決めるのではなく、一つ一つのことをメンバーで話しながら行ったことで進行がスムーズにいけたのではないかと感じた。1人で進めてしまうと一つの案しか出ないけど、一つ一つ確認しながら行うことでこうした方がもっと子どもが楽しむにはいいんじゃないかという案が出てきたりグループの団結にも繋がっていくと思った。また進めていく中で最初は意見が出ず上手く進まなかったが、劇が完成していくうちにもっとこうしようと子どもに楽しんで欲しいという気持ちがみんなの気持ちをひとつにしたのだと思えた。プレと本番までなかなか全員が揃う時間がとれず、練習が出来なかったこともあったが劇にでる人もでない人も自分にできる最大を考えながら行動ができていたと思う。画面を通して子どもと関わるということは自分が想像していたより難しいと感じたこともあったが、幼教こども劇場を通して貴重な体験ができて良かったと思った。

【馬場心愛】
　今回の幼教こども劇場の学びとして、子どもたちの反応を様々な視点で予測するということが大切だと言うことを学んだ。1つだけの反応の答えを準備するのではなく、他の反応のパターンを用意することで焦りを少なくしたり、想像力を豊かにする事が出来たように思えた。また、多数の子どもたちの意見と少数派の子どもたちの意見を聞き取り、どちらともの意見に共感をし聞こえてるという安心感や一緒に参加できているという嬉しい気持ちに全員がなるように心掛けた。そのためには画面越しではあるが子どもたちの表情や動きをしっかり確認した。その他にもこども劇場の準備の際にはみんなと協力をして道具を製作した。絵が得意な人や手先が器用な人とお互いに協力し合いながら行うことが出来た。また、進捗状況を確認しながら次に行うことを明確にして、作業を行うことができ一致団結して行うことが出来た。改めて協力して期限に間に合うように作業を進めることや変更点の確認、小物の製作など短期間でより良いものを完成させることが出来たと感じている。

【森田琴海】
　子ども劇場をして学んだことは、協力して取り組むことの大切さである。子ども劇場を作りあげていくなかで、全員がそれぞれ意見を述べてその意見を尊重しながら活動していくなかで全員がよりいいものを作ろうという気持ちが伝わった。自分の担当じゃない作業でも協力し合うことで、気づかないような改善点に気づく事が出来たり、良い案がたくさん出るなと感じた。また、たくさんの意見を聞くことで自分が想像も付かない案が出たりしてこんな考え方もあるんだな、こんなやり方もあるんだなと気付くことができた。プレをしてみて改善する所がたくさん出てきた際に全員でここはこうしようでもこうした方が良いかもと遠慮せずに一人一人が意見を言い合う環境が出来ていたのがとても印象に残っている。全員で協力することで大変だなと思う事も楽しいと感じる事ができたし、誰1人としてサボらなかったから終わった後の達成感が大きかったのだと今回の子ども劇場を通して強く感じたし、とても良い経験になった。

【吉田光里】
　今回の幼教こども劇場の学びとして、自分たちの取り組みとして、絵本を元に劇を作り上げ、一人一人が自分に出来ることを見つけ行動することが大切なことを学ぶことが出来た。ストーリーがある程度決まったら次は子どもたちとどうやったらリモートで関われるか、楽しめるかなどを考えていたが、1人の案だけでなくみんなで協力することで違った案が出てよりいい作品になると感じた。自分たちのグループでは、自分の担当以外の作業も自分に出来ることを探し、期間内に仕上げることが出来たと思う。そして、よりチームワークが深まったなと感じた。実際やってみて、画面越しでなかなか子どもの表情が読み取れない

なか、中々一人一人と向き合うことは出来なかったが、全体的に楽しんでくれていたのかなと感じた。その中でも自分たちの反省点は多いと思うが、やりきった部分も多いと思うし、この『100かいだてのいえ』の劇を仕上げれたという達成感をこのグループで味わうことが出来てよかった。

【吉武未来】
　今回の幼教子ども劇場で学んだことは、子ども達の目線になって考えることの大切さだ。1回目のプレでは職業同士が結婚するというストーリーだったが、実際子ども達にやってみると子ども達の反応が思っていた反応ではなく、グループ全体の反省で「結婚式は子ども達にとって難しいんじゃないか」という意見が出て、子ども達みんなの誕生日をお祝いしようと変更になった。変更してからの本番では、子ども達も理解しやすくなったからか2園ともすごく反応してくれてグループ全体でも上手くいったんじゃないかなと思う。またシルエットクイズでは、子ども達がわかりやすいように大きく書いたりシルエットにする物の特徴を書いたり子ども達の目線になって他の道具も作るようにした。幼教子ども劇場という貴重な経験ができ、この幼教子ども劇場で学んだことはこれから就職してからもすごく大切になってくると思うので、子ども達の目線になって考えることを大事にして保育を行っていきたいなと思った。

【緒方遼】
　今回の幼教子ども劇場を通しての学びは同じ目標に向かって一人ひとりが前向きに行動することの大切さである。物語の骨組みがはっきりしない初めのうちはアイデアも発言も少なかったと感じるが、少しずつ方向性が見えてきたり、子どもたちがどうしたら楽しんでくれるかを考えることで、面白そうなアイデアや発想が浮かんでくるようになっていた。『100かいだてのいえ』の本を題材にしたため、どうしたらその絵本の世界観に入り込めるかを試行錯誤しながら全員で取り組むことができた。こども劇場の準備を進める中で疑問に思うことやより良いアイデアが浮かんだ時に、自然と話し合える関係性ができており、共通の目標ができてくると、小道具を作ったりする際にも効率的に周りの状況を観察しながら準備を進めることができた。プレでの改善点や他のグループからの意見を受けとめ、展開を再度考え直すことができたことで本番はより良い作品が出来上がったと感じる。画面の奥にいる子どもたちがどうしたら楽しんでくれるのかをみんなで考えた集大成がこの作品へと繋がったのだと思う。常に情報共有をして、共通理解することや、同じ目標に向かって積極的に取り組むこと、協力することの大切さを改めて感じることができ、たくさんの学びを得ることができた貴重な経験になった。

【大西美咲】
　今回の幼教子ども劇場を通じて得た最大の学びは、子どもの反応に合わせて臨機応変に合わせて言葉かけや遊びを変えて行くことの大切さである。子どもたちがどんな遊びをしたいのか意見を聞きそれに応じて進めて行くことを心がけた。この学びを通じて、就職した際に子どもたちの意思に合わせて保育ができるようになりたいと感じた。

【三浦ななみ】
　今回の幼教子ども劇場で学んだことは協力することによってより良いものができるということである。みんなでいろいろなアイディアをだすことによってこのような考え方もあるんだと子どもたちによく伝わるようにしっかりと考え行動することができていた。リモートだったので対面よりコミュニケーションが取りずらい中どのようにしたら子どもたちに分かりやすく届くのか、絵は大きくして分かりやすくしたり声をはきはきと大きくする、カメラ操作をすばやくするなどそれぞれ担当のところをみんな一生懸命頑張って取り組めていたからこのようなすばらしい作品になったと思う。このようなことからみんなと協力するという

ことによってよりよいものになっていっているということをこの幼教子ども劇場でよく学ぶことができた。

【中村愛】
　今回の幼教こども劇場を実践してみて、みんなと協力して計画から準備を通して、実践まで通す難しさなどを痛感した。限られた時間の中で、子どもたちがどのように楽しんでくれるかなども考慮しながら計画しなくてはならないと考えるのがとても大変だと感じた。現場でも、行事ごとの準備や計画が必ず入ってくることも踏まえ、子どもたちがどんな経験や体験、楽しみを感じてくれるかなどを考えながら計画することの楽しさも感じることができた。また、上手くいかなかったことも沢山あり、反省や改善を繰り返し、より良いものにしようとすることが大事なのだと感じた。この経験は現場に出てもとても大きな経験となるであろうこの幼教こども劇場だった。この経験を生かし、子どもたちへの保育をより良いものにしていきたいと強く思った。

【中島希】
　今回の幼教子ども劇場を通して得た最大の学びは、グループ内で協力し合い、全員で一つのものを作り上げることの楽しさと達成感である。チームで協力して一つのものを作り上げることは、アイデアやそれぞれが持つスキルを結集し、共通の目標に向かって進む過程があるからこそ、楽しさや達成感が生まれると学んだ。全員で協力することによって、一人ひとりの強みを生かし、成果にこだわることによってさらなる結束力が生まれ楽しさに繋がった。そして役割分担や全員でお互いに協力し合うことで、みんなの力で作り上げたという達成感を得ることができた。何よりも重要であると思ったのは、コミュニケーションを取ることである。例え個々で良いものを作りたいという強い気持ちを持っていたとしても、それを伝え合い、受け止め合わなければ、それぞれの思いばかりで溢れてしまい、チームは成り立たなくなってしまう。私たちのグループは、リーダーをはじめとして全員で頻繁にコミュニケーションを取り合って連携が取れていたからこそ、達成感や作り上げる過程での楽しさをたくさん味わえたのだと思う。

出演する人たちのカンペ